

總 說

大正十二年九月一日、帝都を中心として起つた大震災は、吾等の思慮を超越した、一大威力を振つて、人類が永い間、血と汗とを以て築き上げた、象牙の塔の如き、麗はしい文化施設を、何の末練も無く、唯た一蹴の下に覆滅し去つた。一切の文字、一切の言葉を以てしても、尙は災害の萬分の一をさへも悉し得られない程、深刻を極めた此の大異變は、眞に我國有史以來の大災害であつた。

この大災害によつて、生靈の奪はれたもの十數萬、物資の泯びたるもの幾十億、吾等の如何なる方法を以てしても、再び得べからざる文献、前人努力の結晶たる幾多の藝術品、これ等人類の至寶が、一朝にして喪はれたることを思ひ、更に大都の殘骸、徒に荒寥たる間に、或は蟲鳴く野邊に、倒れ埋もれたる廢屋の間に彷徨して、亡びたる肉親のかばねを求め、逝ける愛人の魂を呼び、飢と疲れとにより、道途に倒れたる人々の悲惨痛烈の狀に想ひ到る時、吾等は、唯だ愴然として顔を掩ふより外はない。

しかし、吾等は徒に悲しみにのみ捉はれてはいなかつた。光は闇より生れた。勇氣は多く悲の内に

生じた。吾等は傷いた心に鞭打ち、あらゆる努力を盡して、遂に自然の與へた大試練に打ち克ち、茲により大なる新文化建設の第一歩を了した。だが吾等の使命は今後にある。吾等は、更に此の新文化の完成に向て、渾身の力を振つて躍進せねばならない。

二

一、相模を中心とした地震の歴史

千年の昔、王代の時から此の方、關東、湘南地方、尾濃地方は、震災地として注目されて來た地であつた。史上に見ゆる關東の大地震の最初のは、弘仁九年（西曆八一八）に起つた。震域は相模、武藏、下總、常陸、上野、下野等に亘つて、多數の壓死者を出した様である。其の後二十三年を経た承和七年に至て、伊豆に地震が起つた。

其後元慶二年九月二十九日（西曆八七八）關東に大地震が起つて、惨害は言語に絶して、民舎一として、全きを得たものはなかつた。壓死者亦莫大な數に上つた。此の大地震は、九月一日の大地震と同じ様に、武藏、相模を中心にして起つたものであつた。

それから、地震史上に、鎌倉の名が最初に現はれたのは、建久二年（西曆一一九一）で其後仁治二年四月三日（西曆一二四一）には地震津波の大被害があつた。建久二年以後文永三年迄（西曆一二六六）の百七十六年間に、鎌倉を中心として起つた目星しい地震は三十六回、即ち五年に一度の平均で

襲來してゐる。殊に正嘉元年十月九日（西曆一二五七）の大地震は、鎌倉時代最大の地震で、神社、佛閣の完きものは一つも無く、築地は破れ、山は崩れ、無数の人民は壓死した。處々方々の地は裂け、水は湧き、下馬橋の邊は、地が破裂して青い火を吐いた（吾妻鏡）といふ事である。

其後相模を中心に起つた大地震には、次の様なものがある。

- | | |
|-------------------------------|------------|
| 一、永享五年九月十六日（西曆一四三三年） | 關東大地震 |
| 二、大永五年八月二十三日（西曆一五二五年） | 相模大地震 |
| 三、寛永十年一月二十一日（西曆一六三三年） | 相模大地震 |
| 四、元祿十六年十一月二十三日（西曆一七〇三年） | 小田原大地震 |
| 五、天明二年七月十五日（西曆一七八二年） | 關東大地震 |
| 六、嘉永六年二月二日（西曆一八五三年） | 小田原大地震 |
| 七、安政二年十一月十一日（陰曆十月二日）（西曆一八五五年） | 小田原強震 |
| 八、大正十二年九月一日（西曆一九二三年） | 江戸及び其の近傍諸國 |

ところで、日本の曆史に現はれた地震は、何月が一番多いかといふと、第一が八月で、次は五月、次は七月、其次が九月と十月であつて、一番少い月は四月である。即ち五月から十月迄の半年は、十一月から三月迄の半年の間より、地震の度数は二割程多くて、大體夏秋の半年に地震が多いといふ譯

になつて来る。

今度は、此の大地震を日別にして考へて見ると、是も少いのは月末で、最も多いのが月初めの五日間である事は、可笑な現象である。そこで、九月一日の地震は、地震季節の地震期日に起つた譯である。

もう一步を進めて、昔の曆を大陽曆に換算して、千五百年間の、日本の地震史を見ると、九月一日に起つた地震は六回ある。第一回は天長四年（西曆八二七）第二回は貞觀元年（西曆八五九）第三回は貞觀九年（西曆八六七）第四回は謙倉時代の初めの文治元年（西曆一一八五）第五回は慶安二年（西曆一六四九）であつた。第六回はこれから約三百年を経た這般の大地震である。それで、時刻の判明して居るものを見ると、正午頃に起つたものが最も多い。九月一日の地震も正午二分前であつた。次に、地震は果して周期的に來るかどうか。よく六十年とか七十年目とかに來るものだといふが、今、前に掲げた相模の地震の表に依つて見て見やう。

地震の起つた年號

年差

一、西曆一四三三年

二、同 一五二五年

三、同 一六三三年

九二年

一〇八年

四、同	一七〇三年	七〇年
五、同	一七八二年	七九年
六、同	一八五三年	七一年
七、	一八五五年	二年
八、	一九二三年	六八年

由之觀是、或る程度までは、循環的に、相當な地震があるものと思つて、油斷をせぬ事に限る。

一、地震の原因

地震は何故起るか？ 昔しは鯨が尾を振ると地震が起るといつて承知して來たが、今日では尋常一年生でも、夫れだけでは仲々に承知はしない。では、現在の科學の方は、如何の様に是れを説明するか？ 理學博士横山又次郎先生に願て聞いて見やう。先生はいはれる。地震の原因は、今日迄の調べに因ると、三つある事が明つて居る。先づ第一は、地盤に龜裂が出來て、其の一方が下に落ち込むことである。是れを學問上からは斷層又は地辻りと稱へて居る。此の一方が落ち込む際に、他の一方は大抵其儘になつてゐるが、又稀れには、多少押し揚げられる事もある。

第二は陥落といつて、地の底にある洞穴が崩れ、其の天井にあたる岩石、土砂が下に墜ちる事で、此の場合でも、其の響きで上の地盤が震動するものである。

第三は火山の破裂である。火山が破裂する際には、多量の水蒸氣、瓦斯、時には溶岩などが噴出し、其の勢で山が震動し、更に山以外の地へも響いて引くのである。是れを火山地震といつて居る。是等三地震中では、第一の地這りに依る地震が一番多い、又大きくもある。火山地震は、火山の附近では可成り激烈ではあるが、大きな地這りに依て起る地震程には廣く傳はらない。陥落地震は、地震中でも最も少規模のものではあるが、區域は狭くも強い事は可成りに強い。

ところで我國に起る地震は、多くが地這りに因るもので、今回の矢張り是れが爲めである。では、何故そんな地這りを起す龜裂などが出来るかといふと、勿論是れには原因がある。

お正月に作る鏡餅を、長く其儘にして置くと何時か其の上に龜裂が出来やう。水田も早魃になると、水が乾いて遂に其の面に龜裂が出来るのは、諸君は已に御承知に異ひない。こんな龜裂は、果して何に依て出来るのかといふと、餅であれ、泥であれ、是れが乾くに從て收縮するからである。換言すれば、龜裂は收縮の爲といふ事が出来る。地盤の龜裂も亦收縮の爲めであつて、此の龜裂が數里、十數里、時に數百里も續いて出来て、是れに沿ふて地這りが起るから、地震も場合に依ると大きなものなるのである。

即ち地殼の不安定が安定の地位に恢復する一種の活動で、今回の地震の原因も恐らくは夫れに異ひ

はなからうと思はれる。

九月一日の大地震

震源地と震域 地震の起つたのは、九月一日、午前十一時五十八分四十四秒六であつて、太平洋沿岸の外側地震帯の活動の結果、相模洋西南部に起つた地殻の陥落と、其の反動として湘南地方、三浦半島、房州半島方面に土地の隆起とを見た爲めである。

今、中央氣象臺、東京帝國大學地震學教室の發表を綜合して見るに、震源地は、東京の南方二十六里即ち伊豆大島附近の海底であつて、振幅六寸に達する波動を示した。初動の方向は北の上下動、初期微動時間は十三・九秒で、丁度元祿十六年十一月二十三日の地震と同じ性質のもので、相模、武藏を主として房總の南部並に伊豆の東部に於て、地盤の弱い地に被害が激しかつた。而して烈震區域は、京濱一帯、千葉、埼玉、静岡の一府四縣に亘り、強震區域は、西は福井、彦根、名古屋、北は石の巻、仙臺附近に及び、弱震區域は、本洲、四國全土に亘つてゐた。

餘震

餘震とは、一ツの大地震の後に起る小震動の事であつて、大きい地震の後に、餘震の強いのは無く、

却て、小地震の後に、餘震の強いのが起る事がある。而して此の餘震は、次第に其勢力を減じて、遂には人體に感じない様になり、間も無く段々に終熄するものである。一體此の地殻の表面は、常に不安定な個所が出来てゐるものであつて、其等の土地が、或は隆起したり、又は低下したりして、以前の安定な状態に移らうといふのが、前にも説明した様な地震の原因であるので、大地震の度毎に、地殻の何處かに、幾分づゝの安定が出来て來るものである。ところが、土地が不安定な状態といふものは、一朝一夕に出来上つたものではなく、永い年月の間に生じたもので、それが愈々持ち切れなくなつて、地震といふものになつて現はれるので、幾百年、幾千年、といふ長い時間を経て出来た不安定な状態が、安定な状態に恢復するには、矢張り相當に長い時間がかかるものである。丁度ゴム紐を引き延ばして、直ぐに放つと、直ぐに縮んで以前の状態に戻るが、若し永い間、是れを引き延して置いて放つと、矢張り相當永い時間を要して縮むと同じ理由で、地殻の不安定な状態といふものは、一度の地震の爲めに、完全に取り除かれるものではない。尙ほ幾らかの不安定が跡に残て居るものである。是れが餘震の起る原因なのである。

で、不安定な個所が少くなるに従つて、餘震の数も少くなるもので、餘震の数が多ければ多い程、不安定の恢復される運動が除々に起る譯であつて、是の餘震の数の多い程、吾々は却て安心してよいのである。大地震の起つた場合には、夫れ丈け、不安定な個所が取り除かれるので、餘震には、夫れ

程の強い震動のものは無く、次第に餘震の力が衰て、不安定な個所も減つて行く譯である。
 こういふ次第で、今度の大地震後も、餘震は次の表の様に恐ろしい數を示して居る。

日附	餘震回数	日附	餘震回数	日附	餘震回数
九月一日	三五六	九月十一日	一七	九月一日	二二
九月二日	二八九	九月十二日	二二	九月二日	二二
九月三日	一七三	九月十三日	一五	九月三日	二二
九月四日	一四三	九月十四日	一	九月四日	二二
九月五日	六三	九月十五日	六	九月五日	二二
九月六日	四五	九月十六日	五	九月六日	二二
九月七日	四三	九月十七日	七	九月七日	二二
九月八日	三六	九月十八日	二	九月八日	二二
九月九日	三〇	九月十九日	五	九月九日	二二
九月十日	一九	九月二十日	六	九月十日	二二
九月十一日	一九	九月二十一日	六	九月十一日	二二
十月計	一一九七	十月計	八六	十月計	三三
九月計	一〇	九月計	〇	九月計	四
九月十二日	一	九月十二日	一	九月十二日	二
九月十三日	四	九月十三日	二	九月十三日	三
九月十四日	一	九月十四日	二	九月十四日	二
九月十五日	一	九月十五日	二	九月十五日	二
九月十六日	一	九月十六日	二	九月十六日	二
九月十七日	一	九月十七日	二	九月十七日	二
九月十八日	一	九月十八日	二	九月十八日	二
九月十九日	一	九月十九日	二	九月十九日	二
九月二十日	一	九月二十日	二	九月二十日	二
九月二十一日	一	九月二十一日	二	九月二十一日	二
九月二十二日	一	九月二十二日	二	九月二十二日	二
九月二十三日	一	九月二十三日	二	九月二十三日	二
九月二十四日	一	九月二十四日	二	九月二十四日	二
九月二十五日	一	九月二十五日	二	九月二十五日	二
九月二十六日	一	九月二十六日	二	九月二十六日	二
九月二十七日	一	九月二十七日	二	九月二十七日	二
九月二十八日	一	九月二十八日	二	九月二十八日	二
九月二十九日	一	九月二十九日	二	九月二十九日	二
九月三十日	一	九月三十日	二	九月三十日	二
九月三十一日	一	九月三十一日	二	九月三十一日	二

是等の數多い餘震の内から、更に、重なる餘震を拾ひ出して見ると、次の様になつてゐる。

大正十二年九月一日大震及び重なる餘震

月日	發震時	震動の大きさ	週期	震源地
主震 九・一	一一、五八、四四 時分秒	一〇三・〇 推定九〇・九	一・五 秒	大島地方沖
同	一二、一、五二	三九・四	二・〇	主震地附近
同	一二、四〇、二〇	二・〇	二・〇	同
同	一二、四八、〇三	五七・六	二・〇	同
同	一四、二二、四九	二一・二	一・五	相模灘
九・二	一一、四六、五五	六九・七	二・三	房總南東沖
同	一四、一〇、二一	九・一	一・二	東京灣東部
同	一八、二七、〇四	五七・六	二・六	一ノ宮沖

計	計	計	計
五十六	三	一五二六	一
六十七	一	一六一七	一
七十八	四	一七一八	一
八十九	一	一八一九	一
九一〇	四	一九二〇	〇
一〇一一	〇	二〇二一	二
計	二九	二〇二一	一八

同	一八、四九、〇二	九・一	二・三	九十九里濱沖
同	二二、九、二九	四五・五	四・六	房總遠洋
同	二三、一六、四六	九・一	一・五	相模灘
九・二六	一七、二四、〇三	二六・〇	二・三	大島東南方沖
一〇・四	〇、五四、二九	一〇・二	〇・七六	相模西部
同五	二二、五、四六	三・七	〇・八	同
一一・五	五、四五、五一	一五・〇	〇・五	武藏中部
同二三	一一、三三、五二	七・八	〇・八	鎌倉沖
一・二五	五、五〇、二四	五九・〇	一・八	相模中部

震災と地質

今度の地震が、地質にどんな影響を與へたかといふと、震災地一帯に亘つては、(一)土地の龜裂(二)土地の低下(三)斷層(四)土地の崩壊(五)土地の隆起(六)砂及び水の噴出(七)井水及温泉の變化等が此の主なるものであつた。そこで、其の一ツ一ツに就て調べて見やう。

一、土地の龜裂 地震の爲めに土地が龜裂するのは、主として沖積地、表土埋立地、盛土に現はれる現象であるが、専門家の調査に依ると洪積層、第三紀層又は火山噴出物から成つてゐる臺地、若しくは丘陵地の邊緣にも是れがあつたといふ事である。中井村で龜裂の甚しかつたのは、盛土である

中村小學校々庭と、大町より旭橋間の道路に生じたのが人目を惹いたか、境別所分敷場の西方約一町程の畑中、並に是れに連続した山林であつた。中村小學校々庭に生じた龜裂は幅約六尺、長さ三十間に亘つたもので、此れが爲めに新校舎は全潰、舊校舎も七分通り崩潰した。境別所の龜裂は幅約五尺、長さ約一町、深さ四尺位に亘る大龜裂であつて、是れに連続した山林に大被害を及ぼした。

二、土地の低下 是れは埋立地に多く起る現象であつて、地質學上の土地沈降とは異つたものである。地震の爲めに、弱い地盤が引き締つて、固定する處から起るもので、小學校々庭北田五二三番地邊に幾分の低下を見た様ではあるが、正確に何尺低下したかといふ事は殆ど判然しない。

三、斷層 震災地一帯に亘つて、斷層のあつたのは、三浦郡下北浦村の沖積層から、第三紀層を通した三條があつた丈で、本村中には今日迄發見せられなかつた。

四、土地の崩潰 崩潰の甚しかつたのは鴨澤に第一に指を屈せなければならぬ。一體此の地方は、古生層、御坂層、第三紀層 から成る急峻の山地であつて、溪谷は狭く、狭い溪谷に階層推積層と沖積層とが沈澱してゐる。そうして此の急峻な山地は厚い表土で被はれて、多くは森林地である。地震の爲め表土が崩潰したり、龜裂が出來たりした處に、更に九月十四日、十五日の大雨の爲めに、龜裂から崩潰して、處に依ると基盤の岩石が裸出して居り、時に山津波を起した處もあつた。是の爲めに田畑、道路、家屋、山林の受けた損害は實に莫大なものがあつた。

五、土地の隆起 本村中には土地の隆起は見なかつた様であるが、海軍の測量に因ると、相模灣の中心より北方に隆起地帯が横はつてゐるといふ事である。

六、砂と水の噴出 地震に伴つて砂や水を噴出する事があるが、是れは龜裂の中から噴出するものが多い。宇松本一番地、中井村役場先では、地震と共に六七尺の水を噴出し、細砂さへ加つて居た。又五所の宮邊の川岸には丈餘に亘る大噴水が起つた。是れも矢張り其處の龜裂から起つたもので、實見者は、土地が陥没して、押切の海水が押し寄せたと思つたと編者に語られたが、あの場合無理もなかつたらうと思はれる。

七、井水、河水、温泉の變化 急激な衝上の結果、基盤を爲してゐる第三紀層及び其後の岩石が隆起し、地盤の脆弱な沖積層埋立地表土等に大な變動を與へた結果井水、河水等に大な變化を及ぼした。即ち従來は汲め共盡さぬ井水、四季滾々と流れて休まなかつた河水が、或は盡き、又は枯れて至大の不便と不自由とを與へた。

大震火災の被害概況

烈震の大慘害に加へて、未曾有の大火が発生した事は、今度の地震の被害を、より大にした最大原因であつた。

此の震火災に因る被害府縣は、東京、神奈川、千葉、静岡、埼玉、山梨、茨城に亘る一府六縣の廣きに亘り、被害の激甚だつた事は、言語に絶した。殊に、東京、横濱の兩市は、火災の爲めに、住宅といはず、商店と謂はず、會社、工場其他の建造物は、その木造である、果た耐震耐火のものであることを問はず、滿目荒涼たる焦土と化して了つた。從て、此間に於ける人畜の死傷は、又非常なもので、親を喪ひ、妻子に分れ、甚しきに至つては、一家を擧げて全滅の悲運に遭逢したる者が尠くなかつた。又、一方に於ては、電燈も瓦斯燈も、一切照明の設備が破壊され、水道は破裂し、交通機關は杜絶し、流言蜚語は、寒村僻地にまで宣傳せられ、眞に物情騒然、人心恟々として、極度の不安に陥り、公安の保持も、秩序の回復も、亦怪まれる位になつた。そこで、遂に九月二日には、戒嚴令さへ布かれた程であつた。

今、是等一府六縣に亘る、被害世帯はどの位あつたか、罹災した人口はどの位かを調べて見ると、次の表の様に、誰れでもが驚かすにはゐられない、恐ろしい數字となつてゐる。

罹災世帯實數

罹災世帯數

大正十二年九月一日現在推計世帯數

全潰 半潰 全燒 半燒 全流失 半流失

計

東京府	東京市	其 他	神奈川縣	横濱市	其 他	千葉縣	埼玉縣	静岡縣	山梨縣	茨城縣	總 計
八七、〇〇〇	四三、〇〇〇	三、四〇〇、〇〇〇	二七四、〇〇〇	九六、九〇〇	一七五、四〇〇	二六二、六〇〇	二四四、九〇〇	一七、〇〇〇	一七、四〇〇	二六九、七〇〇	二、一三、九〇〇
一六、四八	三、九一六	一一、五〇二	六六、八五三	一八、一四九	四、七〇四	一四、三八五	四、八五三	五八八	二、一九七	一三〇	一五、五三四
三三、二四六	四、三三〇	一九、〇一六	六一、五三一	一九、八六五	四一、六五六	七、五二五	三、八八〇	二、二五〇	一〇、二一九	三三二	一〇八、九七三
三二〇、三七一	三〇〇、〇五九	一〇、三三二	六五、〇二九	五五、八六六	九、二〇三	四四九	—	—	—	—	三七五、八五五
七五	六	六九〇	一九	—	一九	—	—	—	—	—	七七
—	—	—	三五	—	三五	—	—	—	—	—	一、〇九四
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	四
三五〇、七九三	三〇八、二七三	四三、五二〇	一九三、八四九	九三、八四〇	一〇〇、〇〇九	三三、四〇七	八、七三三	二、八三九	一三、一八三	四六一	五九三、二六四

備 考

東京府静岡縣の現在世帯數は被害なき郡市を除いたものである。

罹災人口の實數

九月一日 現在 推計人口	罹 災 人 口	罹災者總數
死者	傷者	行方不明
以上計	死傷行方不明 以外ノ罹災者	

東京府	四、〇五、七〇〇	六八、一八四	四四、〇三〇	三三、八七三	一四七、〇八七	一、三六七、〇三七	一、五三四、二四
東京市	二、三〇九、六〇〇	六七、一〇六	四二、二九六	三四、三三六	一四三、六三八	一、一九一、一四七	一、三三三、七八五
其 他	一、七二六、一〇〇	一、〇七六	二、七三四	六三七	四、四四九	一九五、八九〇	二〇〇、三三九
神奈川縣	一、三七九、〇〇〇	三九、四二二	五四、三三三	三、八二八	八七、四六二	八六八、七七〇	九五六、三三二
横濱市	四四六、六一〇	三三、四四〇	四二、〇五三	三、一八三	六八、六七六	三四四、二三〇	四二二、八九六
其 他	九三三、四〇〇	五、九七二	一一、一六九	六四五	一八、七六六	五三四、五五〇	五四三、三三六
千葉縣	一、三四七、二〇〇	一、三四五	二、七八四	一三	四、一四三	一〇六、〇九五	一一〇、三七七
埼玉縣	一、三五五、八〇〇	三三八	五二二	—	七四〇	四七、六三八	四八、三七六
静岡縣	六〇二、〇〇〇	二〇	一一六	—	一三六	一四、五三五	一四、六七一
山梨縣	六九七、四〇〇	二七五	一、二四三	六八	一、六八六	七三、三四八	七三、九三四
茨城縣	一、三九九、一〇〇	一〇	五四	—	六四	二、三六二	二、四二六
總 計	一〇、八二六、二〇〇	九九、四七四	一〇二、九六一	三六、七八一	三四二、三三七	二、四九八、六八五	二、七四〇、〇〇一

備 考 東京府静岡縣の現在推計人口には罹災なき都市を除く。

震災當時の氣象

大震當時の氣象に就て中央氣象臺發表の報告に基て、當時の天候を叙して見やう。
イ、風。

八月二十七日石垣、沖繩兩島の中間に發生した低氣壓は、次第に發達して、三十日午前六時には颱風の性質を帯び、九州の西南に迫り、同夜鹿兒島では氣壓七三六耗に降り、風雨を起して被害もあつた程であつた。低氣壓は更に東北東に進行を續けたが、此時名古屋方面に極めて小區域の副低氣壓が發生し、東に進で東京の北を通過し、一日午前十時頃、東京には短時間の急風猛雨があつたが、間もなく止んで、風向は南に轉じた、此の時大地震が襲來したのであつた。

當時の氣壓は、震災地附近にあつては、大體北に低く南に高く、傾度は略北西から南東に向て居た。其後風速の變化は次表の様に、風向は次第に西に廻り、更に北に廻り、風速は漸次速度を増し、午後十一時には最も強く、北西から毎秒二一、八米の速で吹いて居つた。(一秒時に二十米以上の風を烈風といふ)此の爲め東京の火事の前進線は、初め北に進み、中頃東に擴り、後南に進んだが、二日午前になつて主風は次第に收まり、風位は更に南に轉じた爲め、南進せんとした前線は、幸にも阻止せられたのであつた。

二日の午前中には、主風が弱くなつた爲め、火事の影響は、割合に認められたやうである。而して偉大な積亂雲は、平日雷雨に伴ふものよりも更に偉觀を呈し、層積雲の帽(普通は卷層雲の帽である)を生じ、又螺旋狀廻轉も著しかつた。

ロ、温度

東京、横濱方面は、火事の爲めに気温が上昇し、温度や水蒸氣張力が減少したのも著しい事である。気温は氣象臺本館の焼火前から已に三十度を越へた。一體九月一日頃の夜間の温度は二十五度を程度とするものであるが、火事の爲め、約六七度も昇つた。而も其れは、九時頃から午前六時に及んだ。氣象臺本館の焼失は夜半頃であつて、其時の気温は、最高寒暖計の示度實に四十六度四、華氏百十五度五を記録した。

ハ、湿度

前記の如く氣象臺類焼以前、神田方面の火事の爲め、已に約六度の高温を示したが、此の昇温の影響に因て、湿度は四〇%に下り、水蒸氣張力は晝間二〇耗程度であつたが、夜半は十五耗程度に下つた。

ニ、氣壓

氣壓は前記低氣壓の通過した爲め、初めは下降を持續し、一日正午には水銀七百四十九耗八で、午後四時には七百四十七耗四に降り、其れから上昇を始め、翌日正午には七百五十三耗八に達し、尙上昇を續けた。

大正十二年九月一日ヨリ三日マデノ氣象

時	風		風		風		一日	一日	一日	一日	一日	一日	一日	一日	一日	一日	一日	一日
	一	二	三	四	五	六												
1	南南東	北北西	南南東	南南東	南南東	南南東	57.3	51.9	55.0	26.0	32.7	26.7	82	41	79			
2	東南東	北	15.4	南南東	南南東	南南東	海面度	51.9	54.8	26.0	32.0	26.8	84	41	81			
3	東南東	北	7.9	南南東	南南東	南南東	700	52.1	54.8	26.0	32.0	26.8	84	41	81			
4	南南東	北	5.0	東	東	東	56.2	52.4	54.6	25.1	31.3	26.6	87	44	84			
5	南南東	北北西	6.0	南	南	南	56.5	52.4	54.5	25.9	31.6	26.0	83	40	88			
6	東	北北西	7.8	南	南	南	55.2	53.1	54.6	26.2	31.0	25.6	84	45	84			
7	南南東	北北西	9.8	南	南	南	54.0	53.6	54.8	26.2	30.3	25.5	84	51	82			
8	南南東	北	9.5	南	南	南	53.4	54.1	54.8	26.6	26.3	26.5	83	63	76			
9	南	南南西	11.2	南	南	南	52.9	54.3	54.8	26.9	26.1	27.7	84	63	76			
10	南	南南西	11.0	南	南	南	52.2	54.4	54.8	26.3	27.7	27.7	90	57	78			
11	南	南南西	10.8	南	南	南	51.5	54.0	54.5	26.7	27.1	28.4	85	66	74			
12	南南東	南南西	12.3	南	南	南	51.1	53.8	54.2	26.3	27.1	28.1	88	60	79			
後1	南南西	南南西	11.7	南	南	南	49.8	53.8	54.1	28.7	26.3	28.1	77	57	89			
2	南	南南西	11.3	南	南	南	49.7	53.9	53.5	29.1	26.9	27.1	76	72	98			
3	南	南南西	11.0	南	南	南	49.0	53.5	53.6	29.5	27.4	25.7	67	67	100			
4	南南西	南	10.7	南	南	南	48.7	53.9	52.8	29.7	27.1	25.7	65	68	100			
							47.4	53.7	52.5	30.0	27.5	25.8	66	69	100			

5	南	13.7	南	8.9	49.3	53.4	52.4	28.3	27.3	26.5	78	69	99
6	西南西	14.5	南	8.3	49.4	54.2	52.6	29.1	27.2	26.6	73	71	100
7	西	13.1	南	6.6	50.0	54.8	52.9	29.8	27.4	26.6	64	64	86
8	西北西	10.4	南	7.9	50.5	55.2	53.0	29.0	27.5	26.6	62	64	88
9	北北西	18.5	南	6.2	50.5	55.3	53.0	30.3	27.2	26.6	52	65	88
10	北北西	19.2	南	5.0	50.8	55.4	52.9	31.9	27.1	26.7	44	72	87
11	北西	21.8	南	4.8	51.4	55.3		32.7	27.1	26.5	45	76	87
12	北北西	17.6	南	6.1	51.6	55.2		32.7	27.0	26.4	41	78	86

一月十五日の強震

大正十三年一月十五日早朝、突然、強烈な地震が襲來した。何にしろ、九月の大震で、地震に對する恐怖觀念の去り切れない時として、冷めかけた人心に新しい油を注ぎ込んだ様になつた。

是の地震は、九月一日の大地震の餘震の一つであつて、今村理學博士は、同日附を以て次の様な觀測を公にされた。

『地震學教室内の觀測によれば、發震時は午前五時五十分二十四秒であつて、初期微動繼續時間一〇・二秒、初動の方向は北六十五度、東の上方動である。これに依て推定すれば、震源は東京から西南西の方向に當り凡そ十九里のところ、即ち相模の西部で、國境に近きところに至る様に思はれる。